

# ループリックが結ぶ教育接続(2): 大学教育を取り巻く教育接続の課題

著者	杉森 公一
雑誌名	文部科学教育通信
巻	336
ページ	20-21
発行年	2014-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/43328">http://hdl.handle.net/2297/43328</a>

# 大学教育を取り巻く教育接続の課題

金沢大学 大学教育開発・支援センター准教授

杉森 公一

## ルーブリックの効果の実際

前回示したように、観点（学修規準）×尺度（基準）のマトリクスとして描かれるルーブリックは、質的な評価が求められるパフォーマンス課題のために用いられ、学生に事前に提示し、教師と共有することで高い効果を発揮する。また、実践を通じ、状況に合わせて改訂され続ける。教師間で、科目間で、大学間で同じ課題を用い、ルーブリックと学生の成果物を持ち寄って調整する「モデレーション」が、観点の不備や尺度間の飛躍を補正する有効な方法のひとつである。逆に、既存の実践から共同開発された汎用ルーブリックから、個々の大学・学科・科目のルーブリックの作成を支援する試みもある。全米カレッジ・大学協会（AAC&U）によるVALUEルーブリックは、教養教育によって形成されるべき能力を抽出し一五領域についての長期的なルーブリックとして作成されている。VAL

UEルーブリックを参考に、大学・学科・科目の文脈に合わせてローカライズして活用される（松下佳代「パフォーマンス評価による学習の質の評価―学習評価の構図の分析にもとづいて」京都大学高等教育研究一八号七五―一四頁二〇一二年）。

形式でグループ討論を取り入れた対話、課題のフィードバックによって授業後の自律的学習につなげることが望ましい。ルーブリックは学生自身で使うことも有効であり、自己評価による省察は、一コマ単位での形成的なふりかえりでも、最終回に自己評価を行う形でもよい。結果として、教育・学習の質の変化と、学生自身のふりかえりを支援する効果が、学生の主体的な学びへつながることが期待できる。

## 学生の学びをパフォーマンスとして捉える

客観テストだけでは測ることが難しい、高次の学習目標と形成的な評価についても、ルーブリックが負うものは大きい。情意領域の目標や、体系的な概念の形成を問う学びの形成そのものをパフォーマンスとして捉えることで、日々の授業での討論やミニッツペーパー回答の質、記述式のテストの文量と質も向上する。単位授与を総括的なペーパーテスト、

フィードバックをしないレポート課題のみで行うことは、場合によっては成績基準の厳格化や公正さとみなすことはできず、一過性の評価に捕われた学生の「浅い学び」を誘うことになる。もし知識・理解を越えたところに、授業目的と学習目標を置くならば、学習意欲と主体性を含む学びのパフォーマンスに関してもルーブリックを作成できる。

アクティブ・ラーニング（学生参加、PBL、協調・協同学習を含む、能動的活動を促す講義法の総称）型の授業において、パフォーマンス課題は効果を発揮する。グループでの学びを取り入れた場合にも、学生の自律的主体的な学習活動が求められる。学習方法と役割をあらかじめ提示せずに協同学習を始めることは困難であり、活動に関与しない学生の存在すら出てくるだろう。

## 教育段階の間にある深い谷

大学においてルーブリックによる教育実践は始まったばかりであり、日本での評価モデルが確立されているとはいえない。さらに、他校で成功したルーブリックをそのまま持ち込んだとしても成功するとは限らないことは、VALUEルーブリックの例が表している。学生と教師の学習進捗を確認するために、自らの手で書くこと、実情と学問分野に沿った形へ書き直すことによって、高い効果を得ることができる。また、VALUEルーブリックの特徴として、四段階の尺度・レベル1（ベンチマーク）↓レベル2・3（マイ

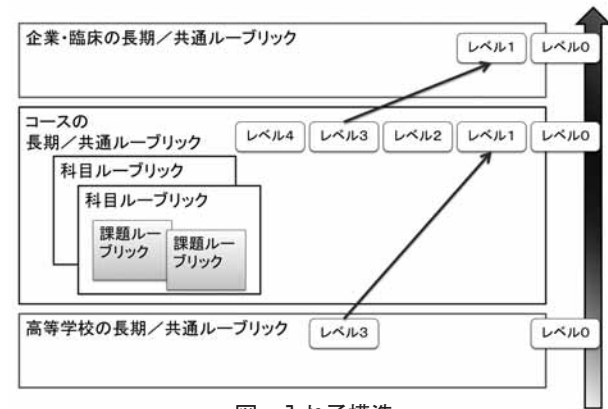


図 入れ子構造

な機能と役割を果たしている。議論が繰り返されてきている。また、大学内部でも個々の科目間の連携、初年次・一般教育・基礎教育

ルストーン）↓レベル4（キャップストーン）で書かれ、学士課程の学年に対応できるように表される。ただし、ベンチマークに満たない「レベル0」から、マイルストーンを刻めないために、ルーブリックの最終レベルに到達できない課題、学生も存在する。それ以前の教育段階・科目でのキャップストーンは妥当であったのか、評価指標と教育方法がずれ違いながら、学びの形成がおさりになって、前教育段階でのキャップストーンが達成されたという錯覚が教育者の自己満足に陥っていないだろうか。

筆者は、教育段階の間にある深い谷は、評価指標の接続の不足に起因すると考えている。教育接続の課題として、教育段階の境目、例えば入試あるいは国家試験・就職試験が十分

と後年次・専門教育、学部教育と大学院教育、それぞれの間に教育接続の問題が隠れており、カリキュラムの体系化を阻む要因となっている。

ルーブリックの入れ子構造を図示すると、教育段階の狭間にまたがる、長期ルーブリックが不在であり、レベル0が谷間となる。たとえば、高等学校での卒業までに身に付く学習成果は、大学入学時に必要とされる能力と厳密に等しいものではないことが考えられる。大学入試で知識・理解のベンチマークを問うているはずなのに、いまや、初年次教育はアカデミック・スキルのリテラシー教育・転換教育として根付き、リメディアル教育（高校までの内容の補習教育）は何らかの形で多くの大学が実施する情勢にある。高大接続の抜本的な改革の議論は、幼保から小中高大にわたったの連続（K-16）が分断されていることの顕在化であろう。さらに、学校卒業後の生涯にわたっての自律的教育・学習にも、長期ルーブリックが果たす役割が一層重要となる。地域・企業で学ばサービス・ラーニング、医療・介護・教育現場での実習教育は、職業と密接に関係し、卒後にわたる新人教育との教育接続が困難になりつつある。ルーブリックの適用範囲の延長、ベンチマークとキャップストーンの擦り合わせによって、教育段階にまたがって存在する谷間を可視化すること、評価者（教師、指導者など）同士の共通理解が進むことが、大学教育内外の教育段階を結ぶ第一歩になると考えている。